

Techno-Ocean News



www.techno-ocean.com
January 2005
No.16

CONTENTS. 目次

更なる飛躍の始まりの年に テクノオーシャン・ネットワーク会長 難波直愛.....	1
将来展望の年に テクノオーシャン・ネットワーク理事長 酒匂敏次.....	1
Techno-Ocean Award 2004.....	1
OTO'04の開催を終えて.....	2~3

OTO'04開催主要データ.....	3
Techno-Ocean Award 2004 CITATION.....	4
テクノオーシャン・ネットワーク新たに3名の理事が就任.....	4
テクノオーシャン・ユース2004開催報告.....	4

更なる飛躍の始まりの年に

テクノオーシャン・ネットワーク会長 難波直愛

明けましておめでとうございます。

昨年は、自然災害の多い年でした。日本に限らず世界規模で異常気象があったように思います。海洋は、これらと多くの関わりがあり、我々に多くのことを語りかけているのかも知れません。海洋は世界共有の財産、多くの国々が強く協調して取り組むべき対象です。

この時期に、昨年はOCEANSと共催でOTO'04が神戸で開催され、各国から科学者が集まり熱心な討論と交流がなされたのは意義深いことと思います。我が国の組織的取り組みは、まだ十分とは言えず更に強化するべく働きかけが必要でしょう。TONは、引き続きこの面での情報発信の中核となるべく努力してまいりますので関係各位のご支援を宜しくお願いいたします。

将来展望の年に

テクノオーシャン・ネットワーク理事長 酒匂敏次

ネットワークのこの一年、ほとんどのエネルギーを11月に神戸で開催されたOTO'04の準備と運営に集中してきました。参加されての印象は如何でしたでしょうか？

OCEANS運営の中で蓄積された共同開催のノウハウとその伝承、会議中の活発な交流(社交、表彰等)、海洋産業の国際比較などに新鮮な刺激を受けられた会員も多かったのではと想像しているところですが、今年はぜひこの経験を生かして、これからのテクノオーシャンのあり方を考えてみたいものだと思っています。10回を卒業して、次の10年、20年を展望するいい機会ではないでしょうか？充実の一年になることを祈念しています。

Techno-Ocean Award 2004

最初の実賞者はJoseph R. Vadus氏に

今回のOTO'04では、日本側主催者の中核的機関であるTechno-Ocean Network (TON)が、Techno-Ocean Awardを新たに贈ることとなった。同Awardは、海洋開発、海洋科学技術の発展に寄与した人物等を対象に授与するもの。その最初の実賞者には、会期中に開催のTON総会で満場一致により、アメリカのIEEE/OES Vice President, International ActivitiesのJoseph R. Vadus氏を選定した。授賞理由としては上記のほかに、テクノオーシャンをはじめ、長く日米間の海洋関係の国際交流促進に大きな役割を果たしてきたことがあげられる。



難波TON会長から賞状を受け取るJoseph R. Vadus氏

授賞式は、OTO'04中日に実施のKobe Cruise Nightの船上バンケットの席で行われた。同クルーズは、神戸港内およびライトアップされた明石海峡大橋を見るという趣向で開催され内外の参加者から大好評を博したものの、Student Posterの優秀者表彰に続いて、このTechno-Ocean Award授賞式が船内のメイン会場で行われたものである。

TONの難波会長および酒匂理事長の署名入り賞状と、神戸の風景を描いた額縁入り記念品が、難波会長からVadus氏に手渡された。同氏は受賞挨拶の中で、「MTS International Awardの最初の実賞者である故岡村健二氏とも知己を得ていたが、今回の受賞第一号はそれと同じ栄誉を受けるに匹敵する喜びである」と感動の言葉を述べて万雷の拍手を浴びていた。(CITATIONは4ページ参照)



Plenary Session



講演するLautenbacher長官

基調講演は、米国海洋大気庁(NOAA)Conrad C.Lautenbacher,Jr.長官による「GEOSS:地球観測能力の向上のための架け橋を」と東京大学地震研究所古村孝志博士による「最近の日本の地震災害データに基づいた強震動の大規模シミュレーション」の2つが行われた。Lautenbacher長官は大統領選挙というイベント、古村博士は講演当日も余震が危惧される新潟中越地震の解析、という共に忙しい中での講演となった。いずれもまさに進行中の地球環境観測システム構築と地震による地盤の運動解析の現状を聴衆に提示した。部分的な観測を積み上げて地球規模にするという長官の話、阪神・淡路大地震と新潟中越地震を例にとった地震の性質と地盤の性質により建物に対する影響が大きく異なるという大規模なシミュレーション解析に基づいた古村博士の話は聴衆に強い印象を与え、シンポジウムの幕開けを飾るに相応しいまさに時宜を得た講演であった。

※GEOSS:Global Earth Observation System of Systems



講演する古村博士

Special Sessions

◆「地球観測10年実施計画の構築と実行」

現在、50数カ国によって策定が進められている地球観測のための10年実施計画がどのように構築され、今後どのように実施されるのか、そして海洋の観測、データ管理、予測などにどのように係わるかについてパネル討議が行われた。パネリストは、日本(文部科学省)、米国(NOAA、IEEE)、英国(SOI)、豪州(CSIRO)のいずれも海洋科学の行政的、科学的リーダーであり、それぞれの立場からその策定プロセス(GEOSS)に対して海洋における観測、とりわけインド洋の観測などの重要性を訴え、セッションとしてのSummaryを提示することができた。今後これをGEOSSなどに提起していくこととした。



◆「2020年に向けた海洋開発の展望」

Future Ocean Advances for 2020と題して、近未来の海洋開発の夢を、アジア地区、米国、欧州から来られた、その道の権威である9名のパネリストに語っていただいた。パネリストは、より合理的な海洋観測システムの構築、新しい海洋観測機器の開発、膨大な海洋観測データの有効利用、海洋の重要性の啓蒙、海洋資源の活用等々について語られた。国際アドバイザー委員会のメンバーからの提案、アイデアを含めて、小冊子を発行し、参加者全員に配布した。パネリスト間、ならびに会場からも活発な議論がなされ、盛り上がった特別セッションとなった。OCEANS'05 Washington DCの主催者から、来年も引き続き同じ特別セッションを開催したいとの要望も出されている。



Technical Sessions

日本で初めて開催されるOCEANS Conferenceと、従来から2年ごとに開催しているテクノオーションとが合体して行われた今回のOCEANS'04MTS/IEEE/TECHNO-OCEAN'04国際シンポジウムは、30ヶ国にも上る国々から約770名の参加者を得て、111の小会場に分かれて344編の海洋科学技術に関する最新の論文発表が行われ、各会場とも発表ならびに質疑で熱気に包まれていた。開催直前の新潟県中越地震や、開催期間中の集中豪雨による災害もあったが、このように世界中から参加した多くの方々の協力を得て、会議は大いに盛り上がり、「Bridges Across the Oceans」というテーマを体現したものとなった。



Tutorials



Tutorialプログラムは11月9日(火)に行われた。今回は、OCEANSで伝統的に取り上げられている水中音響/センサー/AUV関連のトピックスに加え、最近特に日本で注目されているメタンハイドレートに関する講義も行われ、全部で8つのTutorialが開講された。講師陣も多彩で、



米国、日本、スウェーデン、ドイツ、カナダから世界トップクラスの専門家が集まった。Tutorialというプログラムは日本ではなじみが薄いので当初参加者が少ないのではと心配されたが、最終的には64名の申し込みがあり、多くの日本人参加者からも世界最新・最先端の科学技術やその基礎となる学問体系のレクチャーには好評をいただいた。

Student posters



Student Poster Competitionには世界各国から100件近いアブストラクト申し込みがあり、その中の34名が旅費・宿泊費・会議参加費を支給される招待発表者として選ばれた。1名がビザの関係で参加することが出来なかったが、参加した学生の内訳は、日本16名、北米10名、欧州6名、オセアニア1名であった。2日間にわたる審査の結果、1位5百 $\%$ 、2位3百 $\%$ 、3位2百 $\%$ の賞金が授与された。また、今回はIEEE/OES Japan Chapterの特別賞に日本人2名が選ばれ、それぞれ1万円の賞金を受取った。最後に、招待学生の旅費・宿泊費・会議参加費・賞金には米国海軍のONRから3万3千 $\%$ 、ハワイのCEROSから1万 $\%$ 、主催団体の一つであるMTSから3千 $\%$ のご支援を戴いたことを記し、関係各位に感謝の意を表したい。



※ONR:Office of Naval Research CEROS:National Defense Center of Excellence for Research in Ocean Sciences

Exhibition



テクノオーシャンとOCEANSとの共同開催で久しぶりに盛況な展示会となり、121社・団体(9ヶ国)191小間の出展をいただき、3日間で約13,500名の来場があった。今回の来場者の多さは、欧米諸国の先端技術とともに、出展いただいた日本の海洋科学技術の到達点と今後の展望に寄せられる注目度の高さを反映したものと感じた。出展者側からは「積極的に自社製品をPRした結果、問い合わせも相次ぎ、受注につながった」、「日本のユーザーと初めて顔をあわせて交流することができ、今後の受注に大いに役立ちそうだ」といった声も寄せられている。次回2006年のテクノオーシャンも意義あるものとなるよう期待したい。



OTO'04開催(2004.11/9~12)結果主要データ

◆Symposium

Technical Session数 111、発表論文344編(26ヶ国・地域)、登録参加者数30ヶ国・地域から約770名が参加(43%は海外)

◆Tutorials

半日コースで計8本、参加者数64名

◆Student Posters

招待発表33編(9ヶ国)、1位表彰T.Charles Humphrey氏(Memorial University of Newfoundland,Canada)

◆Exhibition

出展機関121(9ヶ国)、来場者数約13,500名(初日4,700名、2日目3,500名、3日目5,300名)

◆船舶一般公開

JAMSTEC海洋調査船「かいよう」、神戸海洋気象台海洋観測船「啓風丸」、海上保安庁測量船「海洋」、民間の海水浄化船

◆MTS Award日本関係受賞者

MTS Industrial Award三菱重工業(株)(同賞日本初)、MTS International Award奈須紀幸氏(同賞日本8件目)

※詳しくはOTO'04 website:www.oceans-technoocean 2004.comをご覧ください。

Techno-Ocean Award 2004 CITATION

Recipient : Mr. Joseph R. Vadus

Mr. Joseph R. Vadus not only has been a recognized leader in the field of ocean resources and underwater technology but has also dedicated himself to the causes of international ocean community. He has been instrumental in organizing international and interdisciplinary conferences, workshops, seminars and meetings, and has helped and encouraged those who are not familiar with the international ocean community to participate in and interact with it. As his title, Chair Emeritus, UJNR, clearly shows, he has been the leader in the US-Japan ocean community exchange and collaboration. He lectured, chaired and advised the Techno-Ocean Conferences and often contributed his expertise to the public education and outreach activities at home and abroad. The Techno-Ocean Network recognizes that he truly deserves to be the first person to receive the Techno-Ocean Award on the occasion of OTO 04 with the theme, Bridges Across the Ocean.

テクノオーシャン・ネットワーク新たに3名の理事が就任

昨年11月10日のOTO'04会期中に開催されたテクノオーシャン・ネットワーク(TON)総会において、石田廣史氏(神戸大学海事科学部 教授)、小和田亮氏(独立行政法人港湾空港技術研究所 理事長)、高木健氏(大阪大学大学院工学研究科 助教授)の3名が新たに理事に選任された。今後は、これらの新理事を加え、計15名の理事でTONの運営を行います。

※TONのwebsite: www.techno-ocean.com参照

テクノオーシャン・ユース2004開催報告



テクノオーシャン・ネットワーク(TON)が推進する青少年対象の海洋科学技術に関する啓発事業「テクノオーシャン・ユース」が、昨年11月13日(土)、神戸大学海事科学部および三菱重工業(株)神戸造船所において開催され、兵庫、大阪、京都から10校30名の参加者があった。

開催当日は気持ちの良い好天に恵まれ、午前(独)海洋研究開発機構の小椋氏(元「しんかい6500」パイロット)による講演会の後、神戸大学海事科学部の練習船「深江丸」の体験乗船を行い、午後からは参加者の事前希望により振り分けた5コースで、同校の教授および学生による講義や実習、三菱重工業(株)神戸造船所での講義や施設見学を行った。

各コースとも少人数の参加であったことと、普段接する機会の少ない体験ということもあり、各参加者はとても熱心に取り組んでいた。

今後とも、海洋への夢や期待を胸いっぱい膨らますことが出来るような「テクノオーシャン・ユース」を開催し、次世代の海洋学者・技術者等の若い芽を育てる手助けとなるよう努力したい。



掲載記事募集!! 皆様からの情報をお寄せ下さい。
e-mail: techno-ocean@kcva.or.jpまで

編集室から

春風献上。しかし去年を象徴する「災」の一字が新年までどっと越波してきたような。阪神・淡路大震災10周年に併せて内外の復興を祈りたい。OTO'04の余韻さめやらぬところもあるが、テクノオーシャン'06に向けて非開催年の今年を是非充実した年に。あちこちに日の丸を立てようという話が、海洋界に広く「福」をもたらす話となるように。(原)

Techno-Ocean News No.16 2005年1月発行(年4回)

発行：テクノオーシャン・ネットワーク

〒650-0046 神戸市中央区港島中町6丁目11-1
(財)神戸国際観光コンベンション協会内
☎078-303-7516 ☎078-302-1870
URL: <http://www.techno-ocean.com>
e-mail: techno-ocean@kcva.or.jp